Career Cruising

キャリア・クルージング

キャリアとは「旅」である。人は誰もが人生という名の旅をする。
人の数だけ旅があるが、いい旅には共通する何かがある。その何かを探すため、
各界で活躍する「よき旅人」たちが辿ってきた航路を論考する。

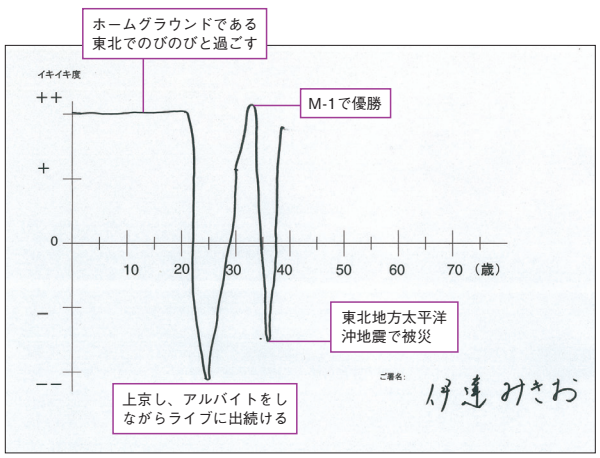
地元・宮城県代表の芸人として全国に知られる存在を目指した

伊達みきお氏 Date Mikio

お笑い芸人

Career History　伊達みきお氏のキャリアヒストリー

1974年	0歳	宮城県仙台市にサラリーマン家庭の長男として生まれる。父の転勤に伴い、大阪府に住んでいた時期もある。外で遊ぶことが好きな少年で、勉強は苦手。中学時代は野球部の練習に打ち込んだ
1990年	15歳	仙台商業高等学校入学。ラグビー部に入部し、後にコンビを結成する富澤たけし氏と出会う。高校在学中にボランティア活動に参加し、福祉関係の仕事に興味を持つ
1994年	19歳	福祉の専門学校を中退し、父の紹介で介護用品の会社に営業職として入社
1998年	23歳	会社を退職。富澤氏と上京し、「サンドウィッチマン」を結成。アルバイトをしながらライブに出続けたが、芸人としての収入は月数万円だった
2002年	28歳	吉本興業主催の新人漫才コンテスト「M-1グランプリ」に挑戦し始める
2005年	30歳	日本テレビの人気お笑い番組「エンタの神様」で地上波テレビ初出演。同番組に繰り返し出演した影響で興行出演など「営業」の仕事が増えたが、テレビ出演は少なく「知る人ぞ知る」存在だった
2007年	33歳	「M-1グランプリ」で優勝。テレビ出演が増えて多忙になったが、地元・宮城県の仕事はできる限り受けていた
2011年	36歳	宮城県・気仙沼市でのロケ中に東北地方太平洋沖地震に被災。「東北魂」と銘打った義援活動やチャリティライブの開催など、東北出身の芸人の中心となって被災地の支援を続けている



直筆の人生グラフ。芸人として芽が出ないまま30歳を目前にした時期と東北地方太平洋沖地震が底。「あとはたいてい幸せですよ」と伊達氏。

お笑いコンビ「サンドウィッチマン」の伊達みきお氏。1998年に高校時代のラグビー部仲間・富澤たけし氏とコンビを結成。10年目にして新人お笑い芸人の日本一を決める「M-1グランプリ」で同大会史上初の「敗者復活」から優勝を果たし、脚光を浴びた。今や全国区で名を知られる存在だが、地元・宮城県での活動も大切にしている。東北地方太平洋沖地震の発生時には、気仙沼市でのロケ中に被災。帰京後、芸能界での復興支援活動の先導役となり、郷土愛の強さでも世間に知られた。

「地元代表の芸人」になるためにもまずは東京でひと旗あげたかった

高校は男子校。ラグビー部の仲間たちとの「くだらない話」が何よりも楽しかった。相方の富澤氏は当時から伊達氏のしゃべりのセンスを見抜いていたが、当の本人はお笑い芸人になるとは考えたこともなかったという。

「家系に銀行員の多い、堅い家庭で育ちましたからね。高校卒業後は福祉系の専門学校を中退し、親父の口利きで営業職として福祉介護用品の会社に入りました」

最初の配属先は福島支社。福島県全域を担当した。

「毎日400キロを営業車で走りました。体はキツかったけど、充実はしていましたね。福祉の仕事は僕に合っていたと思います。社訓の『思いやり』という言葉は今でも大切にしているんですよ。福祉の現場だけでなくて、すべての根本にこの言葉があると思います」

営業成績も良く、入社2年目には仙台本社でいちばん大きな地区を任されるまでに。富澤氏から「一緒にお笑い芸人を目指さないか」と持ちかけられたのはこの頃だ。

「親父のコネで入った会社を辞めるわけにはいかないと答えました。でも、富澤は何度も誘ってきましたし、僕も『非現実的だけど、面白そうだな』という気持ちがあって強くは断らずにいました」

転機は祖父の他界。人の命のはかなさを感じ、「人生、やりたいことはやらないと」と思ったという。会社を辞めて富澤氏とコンビを結成。夜行バスに乗って上京し、その後10年暮らすことになる家賃6万8000円のアパートを2人で借りた。24歳のときだ。その後はアルバイトをしながらライブに出続けたが、売れなかった。

「正直、上京時は『ダメなら3年で帰ろう』と軽い気持ちでした。でも、3年経っても帰らなかった。結果を出さないまま帰りたくなかったんです。それに僕には『い

つか地元・宮城県代表の芸人として全国に知られる存在になり、地元にお笑い文化を根づかせたい』という夢がありました。宮城県出身の芸人が少なく、お笑いのライブハウスもなかったからです。その夢をかなえるためにも、まずは東京でひと旗あげたいと思っていました」

モノになるかならないかは自分たちで見極める

あっという間に上京後5年が過ぎたが、30歳を目前にして芸人としての収入は月に数万円しかなかった。

「東京にはアルバイトをしに来たんじゃない。もっと本気でお笑いをやろうと富澤と話し合い、2005年の1年間を勝負の年に決めました。必死で頑張って、それでもテレビに出られないなら解散する心づもりでした。この業界では、誰もが成功するわけではありません。モノになるかならないかは、自分たちで見極めなければいけない。ついにそのときがきたという感じでした」

アルバイトを減らし、ライブを月15本と以前の3倍に増やした。なじみのライブハウスで同じ来場者の笑いを取り続けても進歩はないと気づいたからだ。

「すると、初めて出演したライブハウスにたまたまカメラが入り、『エンタの神様』のプロデューサーの目に留まって番組出演が決まったんです」

「エンタの神様」は芸人が漫才やコントなどのネタを見せる、当時大人気の番組だ。サンドウィッチマンは同番組に15回出演。イベント出演など「営業」の仕事も増え、念願だった地元からの仕事の依頼も舞い込んだ。芸人の仕事だけで食べていけるようになったのもこの頃だ。ただ、テレビ出演は増えず、知名度は上がらなかった。若い女性にウケにくい、2人の風貌も理由の1つだったのかもしれないと伊達氏は分析する。

「ネタも僕らのは男臭くて、ライブでも男性や舞台袖の芸人にはウケても、女性のお客さんの反応は良くなかったです。でも、笑いの方向性を変える気はありませんでした。自分たちが面白いと思うものを見せたかった。それはコンビ結成当初から一貫して変わりませんでした」

被災地を何度も訪れ、笑いの意味を肌で感じた

ブレイクのきっかけとなった「M-1グランプリ」には2002年から毎年出場していた。2005年、2006年は準決勝まで進んだが、目標の決勝進出はかなわず、優勝した2007年も準決勝では一度敗退している。

「今となっては恥ずかしい話ですが、M-1は吉本興業主催の大会なので、弱小事務所所属の僕らは不利なんだと勝手に思い込んでがっかりしました。でも、勝負は投げたくなかった。敗者復活戦では全力を尽くしました」

その敗者復活戦を勝ち抜き、決勝を1位で通過。優勝決定戦で3組のなかから勝利を勝ち取った。その後はテレビ番組に引っ張りだことなり、仕事量は以前の10倍になった。しばらくは息をつく暇もなかった。

「何をすべきなのかもわからないままにいろいろな番組に呼んでいただいて、みなさんの期待に応えられているのか悩んだ時期もありました。そんなときに爆笑問題の太田さんが『踊らされていればいいんだよ、今は。そうすればサンドウィッチマンのいちばんいい使い方を、仕事をくれる側が考えてくれるから』と言ってくれたのが忘れられません。肩の力が抜けてラクになりました」

東京での知名度が上がると、地元・宮城県のテレビ番組やイベントへの出演も増えた。「もともと地元の仕事は手弁当でも受けていましたが、M-1優勝後は新幹線代を出してもらえてうれしかった」と笑う。東北地方太平洋沖地震が発生したときも気仙沼市で仕事中だった。

「東京に戻ってすぐ、『笑いで地元を元気に』とみなさんから言われましたが、今はその時期ではないと思いました。そこで、僕らにできることを考えて『東北魂』と銘打って被災地支援活動を始めたんです。3月中に数回被災地に入りましたが、笑いたいと思っている人は誰もいなかったです。でも、思い切って半年後に仙台でライブをやったら、宮城県全域から1000名もの人が来てくれ、生きていくうえで笑いはやはり大事なんだと実感しました。だから、もっとみなさんを笑わせたいですね」

After
Interview

地元という「軸」を持った
芸人としての新しいキャリア観

大久保幸夫　ワークス研究所　所長

芸人の地元とのかかわり方には、3パターンあると思う。①地元で売れて晴れて東京に出て全国区になるパターン、②ローカルタレントとして、もっぱら地元で知名度を上げて地元で仕事をしていくパターン、③方言を活かして地元の代表として全国区で活躍するパターンである。しかし、サンドウィッチマンの伊達氏はそのどれにも当てはまらない。彼の場合は、「地元で長く仕事を続けるために、全国区でも活躍しておく」というまったく新しいパターンだ。

まだ売れない頃に地元・宮城で仕事があるときには夜行バスを利用していた。そのときに「早く新幹線で帰れるようになりたい」と思ったという。この目標設定はかなり変わっている。全国区の芸人になって全国放送に出演して地元の人に見てもらいたい、というのが従来の考え方で、活動の軸を地元に置きたいとは普通は思わないだろう。

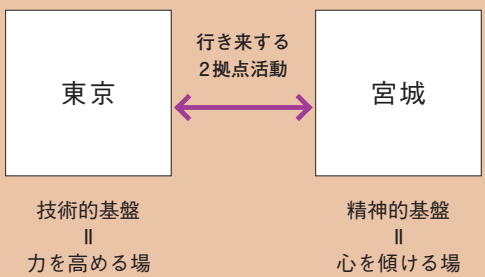
それは戦略というよりも、単純に「宮城そして仙台が好きでしょうがないから」だと言う。東京の仕事を犠牲にしてまで、仙台の仕事を受けることもある。自分が断れば、誰か別の人がやる。自分の地元において、それは許せないというのだ。

事務所側からすれば困るところもあるのだろうが、彼はけっしてぶれない。

震災後の義援活動である「東北魂」では、宮城県出身者の先頭に立った。それが自然に思えるのは、それ以前から地元重視の活動を継続してきたからだろう。

経済がグローバル化するにつれて、その反対にローカル化も進んでいるように思う。企業も個人も、グローバルに生きるか、ローカルに生きるか、あるいはその両方をバランスさせるか（Think Locally,Act Globally）、選択を迫られている。

ローカル＝質が低い、ということではないところが肝心だ。サンドウィッチマンの芸は玄人受けする本格派で、どこか古典落語を思わせる高い技術に裏打ちされたものである。

伊達氏のようなキャリア観は、これから多くの芸人に影響を与えていくのではないだろうか。地元とのかかわり方の第4のパターンとして定着していくのかもしれない。

サンドウィッチマンの
Think Locally,Act Nationally